

平成十九年六月二十八日（木曜日）（未定稿）

[○白眞勲君](#) 民主党・新緑風会の白眞勲でございます。今日は拉致問題ということでございますけれども、特に麻生外務大臣におかれましては、今回、外交防衛委員会、そしてこの拉致問題、多分今日が今国会での恐らく外務大臣との最後の質問、答弁という形になるかと思いますが、本当に長い時間帯私とお付き合いくださいまして今回ありがとうございました。恐らく奥様よりも私の方が長くお話をさせていただいたんじゃないかなと思っておるわけでございます、まあそういう面では本当にいつも誠実に応対くださって有り難いなというふうに思っております。

早速、質問に入らせていただきたいと思います。

ヒル国務次官補がピョンヤンに入りまして、今回の訪問についてはいろいろマスコミでも、なぜまだ初期段階の措置の実施が確認もされていない時点で行ったのかと。そもそも初期段階といっても韓国のマスコミによると、実際にはくず鉄の塊と大差ない原子炉を閉鎖するだけなんじゃないかみたいなの、結構そういうようなことも言われているわけなんです。施設も閉鎖されることもない、それを確認すること

もないまんまもうピョンヤンに行ってしまったことに対しては、もうちょっと見極めてから訪問してもいいんじゃないかみたいな声もあったわけなんですけど、行って帰ってきてから、またこんなことを大臣に聞いてもどうかとは思いますが、まずこの辺について、大臣の御見解をお聞きしたいと思います。

○国務大臣（麻生太郎君） 今、おっしゃいましたように、去る二十一日の日にヒル国務次官補はピョンヤンに行っております。この核問題に関して、初期段階の措置につき実質的な議論を行うということが主たる目的ということになって、行く前に連絡もあっておりましたので、私どもとしてはこの非核化に向けた今後の措置についての段階で、これが初期段階の措置までは行くという確信がそれなりに、まあBDAの話が当時まだモスクーで止まっている状況にはありましたけれども、そういった段階で行こうということになったんだと存じます。

御存じのように、二十五日の日にBDAの話に関しましては、モスクーの発表があり、続いてピョンヤンからも発表があつて、この問題について、資金の問題が解決したという公式な声明が出されておりますので、二月の六者協議から数えて四か月まあ遅延した形にはなつて

おりますけれども、成果文書の履行に入っていくんだという旨を正式に発表しておりますので、今 I A E A のいわゆる査察官というものが、査察官じゃない、実務代表団が今ピョンヤン入りをしておりますということだと思えます。

で、日本政府としては、これはもうやっと、別にそんな喜ぶべき話でもない、やっと四か月ぶりに元へ戻ったという話なんですから、これからの話なので、そんなよかったよかったという話では全然ないと、基本的にそう思っております。

また、この拉致問題に関して言わせていただくと、この拉致問題に関しましては、ヒル国務次官補の方から、この問題を解決しない限りは日朝問題は進展しませんよという話で、これは、日朝関係が良くならないということはこれはおたくの将来にとっても余りいいことないからという話で米国の考え方を伝えたということも確かだというところまで来ております。

いずれにいたしましても、この話が今後いよいよ実務者、六者の実務者のレベルが最初に上がってくるんだと思えますけれども、一応初期段階ということですけど、問題は、非核化が最終目的 ですから、そ

ここに行くまでの第一歩がやっと二月から数えて四か月ぶりにそこまで戻ってスタートできるということになったというところまで来たということだと思っております、なかなかそんな簡単にこれからまた先に進むかといえ、ここまで大変だった騒ぎがずっと進むかというような感じで見るとは、そんな甘い話じゃないと私どもはそう思っておりますので、粘り強くやっていかねばならぬと基本的にはそう思っております。

○白眞勲君 先日、東京でヒル国務次官補の記者会見を英文で見たら、クイック、クイックと連呼しているんですね。また、ワシントンの会見では、今度、朝鮮半島の恒久的平和体制を目指す四か国の機構の創設をなんということまで、そこまで言及するのかみたいのところまで私としては考えていたわけで、何かやけに急いでいるような感じも受けなくはない。

そういう中で、麻生外務大臣は今もおっしゃいましたように、焦って行って足下見られるぐらいならあほらしい話はないみたいなことまで麻生大臣もおっしゃっていると。私もまあ同感なんですけれども、そういう中で、韓国も賛否両論はあるものの、四十万トンの食糧支援

というものをこの六月三十日から送る方向と。そういう中で、韓国の宋外相はライス国務長官とも会談するという、こういういろいろな各国の連携がどんどん進んでいる中ですがけれども、麻生大臣はこの件に関してどういうふうにお考えなんでしょうか。

○国務大臣（麻生太郎君） 四か国の……

○白眞勲君 全体の今の動きです。

○国務大臣（麻生太郎君） 四か国の話は朝鮮事変にさかのぼりますので、昭和二十七年と六年、ここらぐらいまでにさかのぼって、休戦協定というものがずっとそのまま継続した状況になっていますので、あの当時、表向きは北朝鮮と韓国、裏は中国とアメリカというような形でしたので、その四者でという話を考えておられるのかなと。それが何でこの時期かなと、いろんなことを考えてはおりますけれども。

いずれにしても、韓国としては、北東アジアにおける安全保障問題として、この六者協議というものを今後とも何らかの形でこの北東アジア地域における安全保障の機構として考えていきたいという考え方があります。これはもう前からいろんな形のところがあるんですけども、私どもはその中に、北朝鮮と一緒にかよというのはそれはちよっ

と話が違うんじゃないかとかいろんな話をずっと言ってきたところではありますけれども、いずれにしても、そういった問題がありますので、今いろんな形で、二者でやろうとしたり、まずはこれでやってみて、こっちでやってみてという、いろんな、六人おりますのでいろんな関係でなろうと思いたすが。

七月の二日からヤン・ジエチー、ヤン・ジエチーというのは何だっけ日本語、楊外交部長、中国の外交部長は今電話しておりましたけど、これ七月の二日からピョンヤンに行くという話をしております。私どもとしてはピョンヤンに行くに当たって、向こうももうほとほとちょっと手焼いているところもありますので、いろいろ向こうに対して、おたくの立場で言うのに当たって、ちょっと悪いけれど、おれたちの話もしてくれと、ここは日朝の間の問題が詰まっているけれども、この拉致問題が解決しない限りは前には進めない、進まないんですよという話をしておりますので、是非力をかしてもらいたい等々の話はしておりますけれども。

いずれにしても、いろいろな、日朝だけで解決するだけではありませんで、アメリカからとかロシアからとか、いろんなことを我々とし

ては考えていかないとこの種の話は前に進まないものだと思っております。

○白眞勲君 もちろん、いろんな各国とのいろいろな話合いあるいは働き掛けを通じた形で前に進めていくという考え方というのはそのとおりだというふうにも私も思うわけですが、そういう中で、この前ヒルさんの記者会見で、国交正常化交渉、アメリカとのですね、な、んというようなことまで始めるようなことまで言い始めているという部分も、まあこれは一月の合意でそういうふうになっていたわけですから、これはそれでいいと思うんですけれども。そうすると、今後は六か国の外相会談というものも当然これ開かれる可能性が出てきているだろうと。ライス国務長官と北朝鮮との会談というものも開かれる、あるだろうかあるかもしれない、あるいは、もしかしたらライス国務長官の訪朝ということもあるかもしれない、あるいは、もしかしたらブッシュ大統領のピョンヤン訪問というのものもあるのかもしれない、今後ですね。

そういったことについてここでちょっと佐々江局長にお聞きしたいんですけれども、この前ヒルさんと実際直接会っているわけなんです

が、その中で、例えば、八月初めにASEAN地域フォーラムの前に別途ライス国務長官が北朝鮮側と会うとか、あるいはライス国務長官が訪朝するとかブッシュ大統領の訪朝、こういったものというのは、話聞いていらっしゃるでしょうか。

○政府参考人（佐々江賢一郎君） ヒル次官補からは、当面のこの初期の措置についてまず実施することが重要で、その関係で六者協議を当面どうするのかということを中心に話をしたわけでございますし、またその関係で、この初期の措置の次の段階の問題についてどうやってこれを実現していくべきかということを中心に話したわけでございます。

その関係で、先ほど大臣の方からお話がありましたこの六者の閣僚会合の可能性についても当然議論をしたわけでございますが、日程については、これは議長国中国が采配するというところで、中国も含めて今後調整していこうということで現時点で確定的なことは決まっておらないというふうに思いますけれども、それを超えて、今先生が言われましたように、米朝間の閣僚レベルの協議、訪朝等については、特にこの訪朝問題については今、現時点で考えている様子はなかったと

いうふうに申し上げておきます。

○白眞勲君 ちょっとここで高濃縮ウランについてお聞きしたいなどいうふうに思います。

アメリカが設備を買い取るというようなことを国務省の報道官が記者会見で述べているわけですがけれども、私としては、全部ちゃんと買い取るならいいんだけど、買い取るだけじゃなくて、できたウランがどれぐらいあるのか、それも検証する必要があると私は思うんですけれども、外務大臣、その辺はどういうふうに思っているのでしょうか。

○国務大臣（麻生太郎君） これは、おっしゃるとおり、余りみんなが語っていませんけれども、非常に大きな問題だと私は基本的にそう思っております。

これは御存じのように、六者会合の共同声明にももう書かれてありますとおりに、いわゆるすべての核兵器及び既存の核計画ということになっておりますので、したがって、当然この高濃縮ウランの問題というものにつきましてはこの中に含まれておるということに考えるのは当然なんで、これは六者で適切に取り扱わなくちゃいかぬところな

んですが、二月の成果文書の中においては、共同声明に言うすべての核計画の一覧表について五者と協議することということになっておりますんで、次の段階においてこれはすべての核計画についての完全な申告の提出ということにやっていくことが明記されておりますんで、したがって、このウランの濃縮計画の話というものは今後のいわゆる焦点の非常に大きな問題の一つになるだろうと、もうおっしゃるとおり、私どももそう思っておりますんで、これは今後検討を五者、五者というか六者でしていかないかぬ大事な大事な部分の一つだと思っております。

○白眞勲君　ここでちょっと官房長官にお聞きしたいんですけれども、いわゆる従軍慰安婦問題についてアメリカの議会での採決が行われたことにつきまして官房長官はあえてコメントしないとのことですが、この決議案は日本政府に対して公式な謝罪というものを求めているわけですから、あえてコメントしないで済むんでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君）　これは繰り返し記者会見等で申し上げておりますけれども、我が国の政府としてのこの従軍慰安婦問題についての考え方というのは、安倍総理が四月に訪米をした際にブッシュ大統

領はもとより議会関係者にもきっちり説明をしているところでございます。それ以上付け加えることはないということで、議会での動きでございまして、他国の議会の動きということで、政府としてそれを云々するという事はすべきではないのではないかという考えでございまして。

○白眞勲君 もちろんそうかもしれませんが、決議は四月の総理の訪米の後に、今回、昨日だか何か行われているわけですね。今まで一生懸命応対していたのは私も分かっていますけれども、でも、その後、決議した後に対してあえてコメントしないというのはちょっとおかしいと思いますけど、いかがでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） これはもう私ども政府としての考え方を理解を求めてまいりましたし、今後も引き続いて地道にそれはやっていくということでございまして、あえてここで新しく付け加えることはないということでございます。

○白眞勲君 安倍総理は、三月五日の予算委員会で、アメリカ下院の決議案は客観的な事実に基づいていないと、あるいは決議があったから謝罪するものではないというふうに発言されているわけですね。つま

り、その決議の前には、決議があっても謝罪しませんよというふうに言っているわけですがけれども、今回はコメントしないというのはおかしいんじゃないでしょうか。これは矛盾していませんか。

決議に対して否定するなら否定するし、一部事実誤認がありますというならありますよというふうに言うべきだと思うし、真摯に受け止めるならそういうふうにする。やはり、その決議の前にはいろいろ言っていて、決議が出たらノーコメントというのはちょっとおかしいと思うんですけども、その辺はいかがでしょうか。

○[国務大臣（塩崎恭久君）](#) 先ほど申し上げましたように、四月にも、訪米した際、安倍総理としての考え方、政府としての考え方はしっかり説明をまいりました。それからの新たに付け加えることはないということでございます。

○[白眞勲君](#) つまり、今回の決議については無視だということなんですか。

○[国務大臣（塩崎恭久君）](#) 新たに付け加えることは特にございませんということでございます。

○[白眞勲君](#) つまり、そうしますと、三月五日の予算委員会で、アメリ

カ下院の決議案は客観的事実に基づいていない、決議があったから謝罪するものではないということに対して付け加えることはないということによろしゅうございますか。

○[国務大臣（塩崎恭久君）](#) 安倍総理は、四月に訪米をいたしまして自らの考え方を述べたところでございます。

○[白眞勲君](#) 総理は、昨日の記者会見で、相当たくさんの方の決議のうちの一つというふうなおっしゃり方をしたわけなんですね。私は、これちょっと問題だと思うんですね。民間の決議ならいざ知らず、最重要同盟国のアメリカの議会が日本政府に対して行われた決議に対してノーコメントというのはちょっと失礼ではないのでしょうか。

今の政府は日本の議会も軽視しているような私は感じがするんですけども、アメリカの議会も軽視してしまうということなのかというのはちょっと余りにも鈍感過ぎるんじゃないかなというふうに私は思うんですが、これはノーコメントじゃなくてのうてんきじゃないかなというふうにも思えるんですけども、その辺はいかがでしょうか。

○[国務大臣（塩崎恭久君）](#) お互い議会は尊重するという精神でいかなければいけないと、こう思っております。

○白眞勲君 それは当たり前ですよ。ですから、どうすべきかということを知っているわけではあります。

○国務大臣（塩崎恭久君） 繰り返し申し上げているように、政府としての考え方は、もう四月に訪米した際にも、それ以降にもテレビなどを通じて申し上げているところで、それ以上付け加えることはないということでございます。

○白眞勲君 この問題は、実は韓国のマスコミでもこう言っているんですね。北朝鮮の核問題で早期に目に見える成果を上げたいアメリカと韓国が、最近の対北朝鮮政策に不満を持つ日本を朝鮮半島に関する政策決定プロセスから締め出すのではないかという予測が出てきている。さらに、慰安婦問題でワシントンポストに広告を出したことについてアメリカの政界は激憤している、激憤ですね、憤っていることも、アメリカが朝鮮半島政策から日本を分離させる要因だと分析しているとの報道もある。

さらに、北朝鮮の労働新聞、ちょっと読んでみましたら、この広告について二十六日付けの面で、面の皮が厚い破廉恥な日本みたいな言い方をしているわけで、まあこれは労働新聞について別にコメントを

求めるつもりもないし、私個人も自分たちのやっていることはさておいてという感じがしますけれども。

要するに、この労働新聞について、労働新聞だけじゃなく、こういった広告が、このワシントンポストに出した広告が、いわゆるいろいろな影響がこの拉致問題にも出始めているんじゃないのかなと。つまり、北朝鮮側による日本排除の口実にされてしまっているという、何かそういったことも思えなくはないんですけれども、このタイミングで韓国のマスコミが指摘した例の広告を含めた一連の慰安婦問題と最近の米朝との急速な接近との関連性があるのかどうか。また、今回の決議とワシントン・ポストの安倍晋三の二枚舌という、三月の社説で出た、つまり拉致問題に熱心な安倍首相が慰安婦問題には目をつぶっているとの指摘がアメリカの対応に微妙な影響を与えて、今回このような米朝の急速な接近に影響を与えたのではないかというふうに思うんですけれども。

外務大臣、よろしいでしょうか。外務大臣、どうでしょうか。聞いていらっしやいました。

○国務大臣（麻生太郎君） 聞いてなかった。ごめん。

○白眞勲君 聞いてなかった。聞いてなかった。もう一回言いましょうか。

じゃ、ちょっと。

○委員長（森ゆうこ君） 速記を止めてください。

〔速記中止〕

○委員長（森ゆうこ君） 速記を起こしてください。

○国務大臣（麻生太郎君） 済みません。

今の御指摘ですけれども、そういうことにならないように、いわゆるこちらに不利益にならないようにするためにいろいろしているんだと思いますけれども、少なくとも、今回の決議文というか、文書の中に御存じのように修正案が、修正文が加わっておりますので、日米同盟は米国の安全保障上利益の基礎であるアジア太平洋の安定、繁栄にとって不可欠であるというパラグラフが挿入されたりいろいろしておりますのは、そういったものの成果なんだと思っております。

○白眞勲君 ちょっと、質問の内容とちょっと答えが違うような感じがしなくはないんですけれども。いわゆるこの拉致問題にこういった広告の、アメリカの対応というのも影響を与えているのではないのかな

ということをちょっと聞いてみたわけなんですけれども。

それで、ちょっとその中で、時間もあれなんで官房長官にちょっとお聞きしたいと思います。

今後六か国会合がいよいよ動き出すという観測がある中で、日本が参加を留保しているエネルギー支援についてヒルさんは、日本も支援に加わることを楽しみにしているというふうにおっしゃっているわけなんですけれども、本来、拉致問題について進展がない場合には我々エネルギー支援はしないというふうに明言しているわけですから、この辺りの考えは変更ないということによろしいですか。端的にお答えください。

○国務大臣（塩崎恭久君） 日本としては、先般の六者会合で、拉致問題の進展が見られない日朝関係の現状においてはエネルギー供与には参加しないという立場を取りましたけれども、この立場に何ら変更はございません。

○白眞勲君 今後当然考えられるのが、初期段階の後の拉致問題の進展という私はキーワードが出てくるのではないかなというふうに思うんですけれども、その中で、EUの議員団が北朝鮮側にこの前訪問しま

して、人権問題について議論する準備があるというふうに北朝鮮側が語ったと。この中の人権問題というのは、これEUと日本が協力して作成した国連の北朝鮮の人権状況の決議案に沿ったもので仮にあるならば、当然この中に拉致問題というのが含まれるわけで、そうすると、今までの北朝鮮の攻撃的な対応ではないということを彼らも言っているわけなんですね。そういったことを考えますと、また、労働新聞、北朝鮮の労働新聞も二十六日に、日本はドイツを見習って 反省し清算しなければならないという、これちょっと微妙な言い回しをして、北朝鮮の雰囲気もちょっと変わってきているんじゃないかなという感じもするんですけれども。

そういう中で、これちょっと官房長官にお聞きしたいんですけれども、先日の拉致特で官房長官が、拉致問題については今後ああそうだったのかという内容のことが中国との間で出ると官房長官はおっしゃったんですよ。そういう思わせぶりっ子なお話し方されたんですが、あれからどうでしょう、具体的に出ましたでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） 先生も御案内のように、外交努力というのはそんな短期間のうちに結実するようなものではないということが多

いと思っております。ですから、したがって、今すぐどうのこうのというようなことが今表に現れているわけではございませんが、当然、今朝も麻生外務大臣は中国の外交部長とお話をされるというようなことを始め、様々なレベルで日本と中国との間の意見交換を行われているわけでごさいます、そういう中でお互い、いい結論が導き出せるように努力をしているところでございます。

○白眞勲君 ということは、そう遠くない将来に何かその辺の結論も出始めるということによろしいでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） 先ほど申し上げたように、外交努力というのはそんな簡単に結実するものではございませんし、表に出なくてもいろんな変化は起きるものでありますから、それはそれとして、着実な進展が私たちの外交においてもあるように、中国との間の話合いも含めて、五者間といたしましうか、六者協議の中で特に詰めなきやいけないと思っておりますし、この六者協議の中に入っていない国々の中でも様々な協力をしてきているところも拉致問題についてあるわけでありまして、これを含めて最大限の努力を我が国として拉致問題解決に向けてやっていきたいと、このように考えております。

○白眞勲君 当然この辺りの中国との間の話合いというものについては外務省が対応されているというふうに思います。そういう中で、六月四日の拉致問題の委員会で外務大臣も、今拉致問題の解決につけていろいろ中国と連携をしていく考えということをおっしゃっているんですけども、ちょっと具体的にどんな連携があるのか教えていただければ、もう今国会もそろそろ最後でございますので、そろそろ言っただいただいてもいいんじゃないかと思いますが。

○国務大臣（麻生太郎君） 今我々としては、初期段階という話になってえらくアメリカは良かったみたいな話をするけど、こんなものは元々四か月遅れの話で、赤飯炊くような話じゃないんじゃないかというのがおれたちの考え方だという話を向こう側にして、やっとこれは元に、スタート台のところのところにやっと立ったという話なんだからという話をして、少なくとも今後六者の共同声明というものの中をよく読んでもらって、これをバランスよく、いろいろ問題がありますんで、これバランスよくやっていかないかぬという話で。

いろいろ、何というの、韓国としては四十万トンはまだやるんだとかいろいろ話しているけれども、我々としては、日朝の間に残ってい

る問題がきちんと何らかの進展が出てこない限りは、我々としては、今官房長官が答えられたとおりに、我々はエネルギーだ何だかんだいろいろ支援の、あれの話に我々は加担することはできないというのはもう全く変わってないから、だから、そちらもその分を、九十五万トンの石油の話がありますんで、あれ九十五万トンというと今バレル六十ドルぐらいとして計算しても三百二、三十億円になろうと思いますんで、そういったものに関しても、少なくとも進展が見られりゃそれに何らかの負担に応じる用意があるというのは前から言っているとおりで、確認して、我々はこういったことだという我々の立場をきちんともう一回、等との、ほかのロシアとの間、いろいろございますけれども、そういったことがきちんと双方で話合いができるようになったのは一年前に比べりゃ随分変わってきたなという感じはいたしております。

○白眞勲君 一年前に比べて随分変わってきたということ、ということは北朝鮮も少し前向きになってきているということだと思いますが、その辺の今後の展望について、大臣としては、もちろん相手がああいうところだからなかなか言いにくいというのはあると思いますが、い

かがでしょうか。

○国務大臣（麻生太郎君） 一年前一番難しかったのは日本と中国です。ここが、中国との日中最初の外相会談をやりましたのは去年の五月ですから、それから、何というの、その前、約一年ぐらい前まで一年間ほとんどありませんから、それから今日まで日中外相会談というのは十何回やったんだと思いますが、そういったことになってきてこの種の問題もいろいろ話がしやすくなったというところが一番大きく変わりましたし、中国側も日本のこの問題に関する意見を聞けるようになったというのが大きな変化だと存じます。

○白眞勲君 そうすると、最後の質問ですけれども、そうすると北朝鮮……

○委員長（森ゆうこ君） 時間が。済みません。

○白眞勲君 はい。北朝鮮との関係においては拉致問題の進展というのはどういう展望があるのか、最後にお聞きしたいと思います。

○委員長（森ゆうこ君） 麻生外務大臣、時間ですので簡潔に。

○国務大臣（麻生太郎君） それこそ、今御指摘のあったように、これこそ相手がよく分からぬというのでありまして、これをずっと持って

いるということに何の意味があるのかがちょっと正直私らにはよく分かりませんが、少なくとも、小泉訪朝以来いろんな形で、新たにこれが拉致としてきちんと認められたり、いろんな形で今まだ事は継続中でありまして、少なくとも調査も何もなくてすべて解決済みなんという態度を今、少なくとも今のところは取っているわけなので、その点に関しては表面的には、白先生、全く進展はないというのが現状だと思っておりますので、これは日本だけでやるのではなくて、世界的な、世界の一致でいかないとなかなか難しいということなんだと思いますので、国際的な圧力、そういったものが一番大事なんだと思っております。少なくとも、イランでも何でも、国連の全会一致になりそうになると必ずイランから電話掛かってきますので、国際的な全会一致はみんな嫌なんだと私はそう思っておりますので、ここらのところは他国との連携が一番大事だと思っております。

[○白眞勲君](#) ありがとうございます。